

青丘文庫研究会 月報

No.285

2016年7月1日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町 3-1-1 (公財)神戸学生青年センター内
TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp
①在日朝鮮人運動史研究会関西支部 (代表・飛田雄一)
②朝鮮近現代史研究会 (代表・水野直樹)
郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料 3000 円
※ 他に、青丘文庫に寄付する図書購入費として 2000 円/年をお願いします。

<巻頭エッセイ>

思考する言語がもてない子どもたち

全淑美



日本生まれの二年生「メグ (仮称)」は説明を求められると、日本語でも中国語でもうまく話せない。否、中国語はできない。でも小さいながらエスニックアイデンティティはしっかりと持っている。中国語はわかると言い張る。彼女のプライドだ。母親に聞くと、保育園から日本語で話してくれと言われ、それ以降あまり中国語で話しかけなくなったという。母親は中学生のとき中国帰国者の孫として来日。夫は中国本土から呼び寄せた。日本語はほとんど話せない。当然子供との会話は少ないことが予想される。今、

中国語で話しかけても、答えは日本語で返ってくるという。

義務教育の全国の学校には、様々な地域からやって来た子供たちが学んでいる。かつて「在日外国人」と言えば在日韓国・朝鮮人がしめていたが、それはもう昔のこととなり、今や中国系が圧倒的に多い。中国帰国者も三世、四世の時代で、帰国二世とその配偶者として中国本土からやって来た保護者の組み合わせが普通である。国際結婚として日本人と結婚する場合もある。どちらか一方が日本人の家庭としてはフィリピンも多く、海外からの直接編入で多いのは、この両者が際立っている。

海外で育ち、日本の学校に転入或いは編入して真っ先に心配なのが「ことば」である。様々なケースがあるが、生まれてより一つの言語を、周囲も自分も使い続けていた子供はうまく二つの言語が身に付く。いわゆるバイリンガルだ。しかし、それは十一歳を過ぎた子供に言えることである。個人差があるが、十歳では心許ない。これ以前に日本にやってきた子供は、自然放置すれば、母語を忘れ去る。ここでいう母語とは初めて耳にして覚えた言語を指す。一方が日本人の親を持つ家庭であればあるほど、母語の消失が激しい。まず親自身が母語の維持の必要性を感じていないのだ。十一、二歳以上ともなれば母語で考え日本語にうまく転換できるようだ。とは言え、十二歳までに身につけた母語だけでは到底バイリンガルとは言えない。相当の努力が必要だ。

さて、ここで質問。「海外からの編入者と日本生まれと、どちらの子供の方が日本語が上手になるでしょうか」。その答え。一般的に海外からの編入者と考えられている。無論様々な環境があり、多種多様であることは言うまでもない。一定の日常会話については、日本生まれの子供は、入学当初から身に着けているのが普通である。

ところが、私の周囲には、どちらの言語も中途半端になる「W リミティッド」予備軍が多数存在す

る。例えば、作文に「わたしは〇ちゃんに負けた。きらい。」とあった。普通に考えると、その子供が〇ちゃんのことが嫌いになったのかなと取れる。しかし、実際は全く違って、「くやしい」ということばを知らないのである。小学二年の例である。このような例は幾つもある。即ち語彙や表現力が足りないのである。けんかの原因を聞いてもうまく話せない。それですぐ手が出る或いは泣いてしまう。思いを言語に並べて表出する。これが難しいのである。それを文字に落として、文章を書くなどは、かなりのハードルである。即ち日常会話が上手になっても、複雑な文章の解釈、読解力、解説などは自然に身に付かない。これは第二言語の習得上の仮説として知られていることであったが、現場にいるとひしひしとを感じる。即ち第二言語としての日本語習得という視点が必要なのであるが、これを学級担任に理解してもらうのも一苦勞である。

さて、その原因はというと、先の保育園の先生のように家庭で違う言語を話しているからではない。私は家庭内の言語環境にあると推測している。例えば中国出身の親であれば、家庭で中国語を使っているのが普通だと思っていたが、違っていた。このような語彙不足の子供の場合に共通していたのは、自分たち大人は中国語を使って会話しているにもかかわらず、子供には日本語で話しかけるというものである。しかもその親はきちんとした日本語教育機関で学んだわけではなく、残念ながら日本語力も不足している。さらに子供の中には言語の発達に最も重要な幼児期に親元を離れ中国へ行かされ、そして、小学校入学前後に再び日本に戻され、日本の小学校に入学するという子供も結構いる。戻ってから家庭内で中国語を使うのなら話は分かるのだが、それもなく、また日本語で話しかける家庭もある。そうすると、もう、頭の中は日本語と中国語でぐちゃぐちゃである。親は「中国人として育てたい」という思いで中国行きを決断したというのだが、中国語を継続していない家庭も結構あると知り驚いた。

一方、家庭では母語を使って、日本語は幼稚園や学校にいるときだけという子供がいる。このような子供は、始めは苦勞するが、遅かれ早かれ自分の言いたい日本語は多少間違っているけど、結構言えるようになる。自分の思いを表現する手段をきちんと持っているからである。生まれてから同一言語の家庭環境で育っている子供は、思考も安定し覚えるのも早い。結構学習成績もよく、新しい知識を得るにも同じことが言える。今まで得た知識を総動員して考えることができ、母語から日本語に転換していくからである。これもみごとに学説（J.カミンズの「相互依存仮説」）通りであった。

言語環境を安定させることが子供の発達にいかに関わるか。そして、多言語の子供を見かけたら、その子供の言語環境、安定した言語生活を送ってきたか、或いは今もそれが継続できているか、に思いをめぐらせてほしい。また、ここに書いたのはほんの一例で、私の受け持ちの子供でも、言語環境は本当に多種多様である。

さらに、最悪の例として多文化をもつ青少年少女が犯罪に手を染めてしまうことがある。その裏には、生活環境が大きく関係していることは言うまでもないが、日本語がよくわからないまま育ち、自分の自己表現も十分できなくなってしまうことが大きな要因となっているのではないだろうか。日本に来て、十分な教育を受けさせてあげられなかった、日本語教育の担当者としては心が痛む。これが今の日本の社会である。私たちが抱えている社会の問題である。

最後に言語とアイデンティティ関係についてよく言われるが、主にエスニックアイデンティティのことを指している。しかし、この仕事に就いて思うこと。日本語しか話せない中国人であろうが、ヘンテコな日本語を話す日本人であろうが、何人(なんじん)であろうが「そんなのカンケイネエ」だ。アイデンティティとはエスニックアイデンティティだけを指すのではない。まず、自己表出に必要なことばを持つこと。思考を言語にする力を身につけること。エスニックアイデンティティより深刻な事態が今起きているのである。

これを書きながらハタと気づいた。かつて朝鮮が日本に支配され、突然、教育が日本語で行われたら、子供たちはどこまで理解できたのだろうか。

第302回朝鮮近現代史研究会（2015年12月13日）

日本と韓国の接点

ードイツにおける日本人コミュニティの調査から

中川慎二

ドイツにはヨーロッパ最大の日本人コミュニティが1960年代から70年代にかけてデュッセルドルフに形成された。主にエリート労働移民といわれる駐在員、外交官などから形成された。ちょうどコミュニティ形成初期にあたる1957年から1962年までの6年間には日本人炭鉱労働者が西ドイツ（当時）に436名派遣された（滞在は1965年まで、残留は32名）。この派遣が終了した1963年から1977年までは韓国から7983人が西ドイツに派遣されている（残留は1250名）。デュッセルドルフはルール工業地域とライン川（河川運輸）を背景にして発展した都市で、西ドイツの首都ボンにも近く、NRW州の州都でもある。戦後西ドイツへの労働移民（矢野 2010）は、西ドイツが労働力募集協定を結び外国人労働者を導入した。第1局面（1955年～73年まで）には、イタリア（1955年）、スペイン、ギリシャ（1960年）、トルコ（61年）、モロッコ（63年）、ポルトガル（64年）、チュニジア（65年）、ユーゴスラビア（68年）が協定を結んだ。

日本からの派遣は、ドイツとイタリアとの政府間協定を知ったひとりの労働官僚が、労働力不足の西ドイツへ日本の労働者派遣を画策した（森 2005）。一方、韓国は1962年に海外移民法を制定し、「移民5か年計画」（1962～66年）による国策（外貨獲得政策）として海外移民事業を推進し、「第2次移民5か年計画」（1966～70年）、「労働力輸出5か年計画」を推進した（朴 2002）。加えて、韓国からは看護婦（約1万人）の西ドイツ派遣が1957年から始まり、韓国人炭鉱労働者と看護婦のカップルも生まれた。合計で約18000人の労働者派遣が行われた。そうして、韓国には帰国者によって「ドイツ村」（慶尚南道南海郡三東面ドイツ路）が作られた。

日本からの派遣の目的は、①技術修得、②西欧民主主義の体験、③日独親善の3つとされたが、日本側には外国人労働者（Gastarbeiter）の意味を取り違えていたらしい。日本側からは概ね炭鉱夫が選抜されて派遣された。韓国からは、必ずしも炭鉱夫ではなかった人も派遣されることがあった。1957年は果たして日本からの海外移住労働者が戦後で最も多かった年でもあった。

第1陣で派遣された湯地弘さん（故人）はデュースブルクのハルボンナー炭鉱で働いた。端島炭鉱（軍艦島）で5年働いたあと、労働争議が激しくなる前にドイツ派遣に加わった。ドイツ人と結婚しドイツにとどまった。炭鉱を後にしてから、ハンブルクに転居し、日本航空ハンブルク支店に勤め、支店長も務めた。ハンブルク独日協会では日独親善に尽くされ、日本とドイツの両国から勲章を与えられた。

1971年にデュッセルドルフにその地位を渡すまで、港町ハンブルクは日本からの貿易の窓口であり、多くの銀行や商社が駐在した。デュッセルドルフ日本食料品店には、当時の韓国からの労働移民の家庭によってはじめられた店もあり、日本と韓国の接点となっている。

<参考文献>

朴 三石（2002）「海外コリアン」中公新書

久永桂子（2013）「韓国における外国人労働者政策と支援活動 ―労働者送出国から受入れ国への転換―」金城学院大学大学院文学研究科提出博士論文

森 廣正（2005）「ドイツで働いた日本人炭鉱労働者」法律文化社

矢野 久（2010）「労働移民の社会史 ―戦後ドイツの経験―」現代書館

Jung-Sook, Yoo（1996）Koreanische Immigrantinnen in Deutschland ―Interessenvertretung und Selbstorganisation. Verlag Dr. Kovac



★★

<新刊案内>

飛田雄一『現場を歩く 現場を綴る—日本・コリア・キリスト教—』
 (かんよう出版、2016.6、四六版、250頁、1500円+税)
 購入希望者は、送料とも1620円を
 <01150-4-43074 飛田雄一>にご送金ください。



●青丘文庫研究会のご案内●

■朝鮮近現代史研究会はお休みです。

■第375回在日朝鮮人運動史研究会関西部会

2016年7月10日(日) 午後2時～5時

「ウトロと国際人権法」 斎藤正樹

※発表ののち、フィールドワークをします。

※会場 京都府城南勤労者福祉会館

宇治市伊勢田町新中ノ荒21-8

電話(0774)-46-0780,0688

近鉄京都線伊勢田駅から徒歩約13分

近鉄京都線大久保駅から徒歩約20分

(※今回は会場がちがいます。ご注意ください)



【今後の研究会の予定】 来月以降の予定。8月は休みです。9月11日(日) 在日(川口祥子)、近現代史(宋伍強)、10月9日(日) 在日(未定)、近現代史(未定)。研究会は毎月第2日曜日です。報告希望者は、飛田または水野まで連絡ください。

【月報の巻頭エッセイの予定】 9月号以降は、渡辺さえ、池貞姫、張允植、横山篤夫、松田利彦、西村寿美子、玄善允、川口祥子。よろしくお願いします。締め切りは前月の10日です。

【編集後記】 ■月報5月号、6月号は休刊しメールニュースのみ発行しました。■今号の月報発送時に、会員の方には青丘文庫研究会会員証を同封しています。青丘文庫研究会会費(月報購読)は3000円/年、です。送金しているのに会員証が来ない、おかしいという方は飛田まで連絡をよろしくお願いします。学生会員で月報の送付が不要な方は会費を免除し会員証を発行しています。希望の方はその旨、飛田 hida@ksyc.jp まで連絡下さい。■今夏は地球温暖化の影響か、猛暑となる予報もでています。みなさん、暑い暑いとビールばかり飲まずに健康に注意しましょう。はい、自戒をこめています。(飛田)